

## 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22年 6月 1日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007 ～ 2009  
 課題番号：19720041  
 研究課題名（和文） うつほ物語の基礎的研究

研究課題名（英文） A fundamental study of *Utsuho Monogatari*

## 研究代表者

大井田 晴彦 (OIDA HARUHIKO)  
 名古屋大学・大学院文学研究科・准教授  
 研究者番号：70313179

研究成果の概要（和文）：日本最初の長篇物語である『うつほ物語』を主に二つの側面から研究を進めた。一つは、歴史学・文化史的な観点によるアプローチである。物語がいかに史実を取り込んで独自の虚構世界を形成しているかを、遣唐使などとの関わりから論じ、かつ物語の基盤にある文人精神を明らかにした。もう一方の柱として、作中人物の造型方法について、清原俊蔭や上野宮らいわゆる三奇人を採り上げて考察した。「人間喜劇」とも評される、多くの人物を通じて物語を語り進めていく技法を明らかにしつつ、彼等を造型した物語作家の思想を究明した。

研究成果の概要（英文）：I studied on *Utsuho Monogatari* that is the oldest long novel in Japan. First, I studied the *Monogatari* by historical and cultural method. I showed how the *Monogatari* formed the world of the fiction to refer to historical events (for instance, Japanese envoy to Tang Dynasty China) or personages. Then, I resesached on characters like *Toshikage* and three eccentricities. To investigate characterization of the *Monogatari*, I showed the thought of the author. I made a presentation at the academic meeting and published papers about these themes.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1400,000	270,000	1,670,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：古代文学

## 1. 研究開始当初の背景

近年、多くの優れた註釈書（室城秀之『うつほ物語 全』、野口元大・校注古典叢書、中野幸一・新編日本古典文学全集など）が整備され、『うつほ物語』の研究は活況を呈しつつある。さまざまな問題意識とアプローチによる多くの研究論文が発表されている。また物語文学研究だけでなく、歴史学などの他領域からも注目を集め始めている。隣接する学問領域として、中国の琴に関する音楽史の進展もめざましく、『うつほ』研究と互いに影響を与えている。このような現況であるからこそ、いっそうの発展を目指すべく、基礎的研究の充実が求められる。なお、研究が活性化しつつあるとはいえ、まだ事典類はもちろん、簡便な入門書や手引き書すらないのが『うつほ物語』研究の現状である。将来の『うつほ物語事典』の作成を視野に入れた研究を進めたい。

## 2. 研究の目的

『うつほ物語』は、ほぼ一世紀にわたる琴の一族の歴史を描いた物語である。史実を踏まえながら物語は虚構の時空を織りなしていくとおぼしい。拙著『うつほ物語の世界』（風間書房、2002年）でも明らかにしたように、この物語は歴史上の嵯峨朝を准拠としており、そこに文人である作者の憧れや理想が投影していることは既に定説化している。さらに物語の細部についても、史実との関連を探っていく必要がある。また、百科全書的なことも評されるように、この物語は、当時の風俗や文物を隅々まで描いており、文化史的に重要な資料として注目されている。秘琴の伝承を中心の話題としているだけに、音楽史・芸能誌との関わりも深い。とりわけ琴学史の研究は近年進歩のめざましい分野である。歴史学・文化史学の研究成果を広く吸収しつつ、虚構の物語の固有性を明らかにすることが、目的の一つである。もう一つの柱として、作中人物論の定位がある。『うつほ物語』のいわゆる作中人物論は、『源氏物語』に比べ、あまり活発ではない。

ともすれば『うつほ』の人物論自体が成り立ちがたいとする見方もある。しかしながら、出自も性格も異なる多くの魅力的な人物が活躍の場を与えられているのであり、まだ発展の余地が大いに残されている領域であるといえる。また研究方法も練り上げていく必要がある。既に『うつほ物語の世界』において、物語の構造や主題と関わらせた作中人物論を展開してきたが、前著では採り上げなかった人物をも含め、作中人物論の可能性を探る。こうした研究の蓄積によって、『うつほ物語』研究の底上げをはかりたい。

## 3. 研究の方法

まず、基本的事項の整理が必要となる。物語中の出来事や、作中人物について、諸註釈なども参看しながら、史実と関連の深い事項を抜き出し、整理していく。作中の事件や人物が、いかに史実をなぞっているか、と同時に、いかにそこから離陸していくか、という点に着目する。

また、作中人物について、巻のどこに登場し、どのように行動しているか、一つ一つの治績や呼称・官位がわかるような、一覧を作成する。『うつほ物語』の作中人物一覧は簡略なものしかなく（宇津保物語研究会編『うつほ物語 本文と索引』付録）、詳細なものが待望されている。これらのデータの収集・整理を通じて、将来的には『うつほ物語事典』へと発展させたい。

こうした基礎的作業を踏まえつつ、論文や学会での口頭発表を行っていく。

## 4. 研究成果

長篇『うつほ物語』は、遣唐使に選ばれた清原俊蔭の遭難・流離によって始発する。既に廃絶して久しい遣唐使を物語の発端に配したところに物語作家の位相がおのずと明らかになるのだが、論文②「『うつほ物語』の俊蔭漂流譚」、⑤「清原俊蔭と小野篁」、⑥「日本古典文学に見る国際交流」などで、史実を

踏まえつつ、そこから離陸し独自の虚構の世界を創造していく物語の機微を明らかにした。日中交渉史など歴史学の成果を取り込みながら物語の独自性を考えた。⑤は、俊蔭と実在の小野篁の関係を、嵯峨朝准説の観点から捉え直し、かつ俊蔭漂流譚と篁冥官説話の構造的類似を明らかにした。以前私が提唱し、定説化している物語の嵯峨朝准説をさらに補強したものである。また、⑥は、中国・陝西師範大学での口頭発表を基にしたものだが、『うつほ物語』を中心に、古代前期から中世における文学作品に見られる日中の交渉、異国表象の問題を扱った。あまり認知されていない日本の古典文学を紹介でき、日中文化交流において有意義な機会を得た。これらの論文は歴史的・文化的アプローチの傾向の強いものであるが、論文⑦「うつほ物語の通過儀礼」も同様に、物語に頻出する、出産や死にまつわる叙述の意味を、当時の風俗の実態を踏まえつつ、解明している。

『うつほ物語』には、出自も性格も異にする多彩な人物が数多く登場し、その総数は千名にも及ぶ。その主要な人物については既に拙著『うつほ物語の世界』において論じてきたが、論文①「『うつほ物語』作中人物覚書」では、上野宮・三春高基・滋野真菅のいわゆる三奇人について、造型の手法と物語における意義を明らかにした。既に三奇人については、石母田正「宇津保物語についての覚書」など、歴史学の立場から、閉塞した貴族社会に対する批判精神が読み取られてきたが、こうした理解をさらに補強しつつ、物語の手法として、三奇人造型の意義を解明した。上野宮が正頼や春宮の戯画化された陰画となっており、笑いをまじえつつ、新たな視角を提供しているのである。なお、この論文では、禁煙の研究ではとかく忘れ去られがちな、物語の本質である娯楽性に目を向けるべきことも提言している。

男性知識人の手になるだけに、『うつほ物語』には、男同士のうるわしい交流の姿がしばしば描かれる。論文④・学会発表②「伊勢物語・惟喬親王章段の主題と方法」では、物語史的に先行する『伊勢物語』を論じた。業平・紀有常・惟喬親王の親交がどのように描かれているか、和歌や漢詩文引用などの分析を通じて明らかにしたものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①大井田晴彦、「『うつほ物語』作中人物覚書—三奇人の造型をめぐる—」、『名古屋大学文学部 研究論集 文学 56』、1~13、(2010.03)、査読有

②大井田晴彦、「『うつほ物語』の俊蔭漂流譚」、『平安文学と隣接諸学7 王朝文学と交通』、557~579、(2009.05)、査読無

③大井田晴彦、「新古今和歌集と中世和歌の世界—名古屋大学附属図書館後藤文庫蔵本を中心に—」、『人文学研究方法の現状と展望—現地調査(Field Work)を中心に—』、108~114、(2009.03)、査読無

④大井田晴彦、「伊勢物語・惟喬親王章段の主題と方法」、『国語と国文学』第85巻9号、16~27(2008.09)、査読有

⑤大井田晴彦、「清原俊蔭と小野篁—『うつほ物語』発端の基盤—」、『名古屋大学文学部 研究論集 文学 54』、1~10(2008.3)、査読無

⑥大井田晴彦、「日本古典文学に見る国際交流—遣唐使をめぐる—」、『日中文化交流の歴史記憶と展望』、124~128(2008.3)、査読無

⑦大井田晴彦、「うつほ物語の通過儀礼」、『平安文学と隣接諸学3 王朝文学と通過儀礼』、大井田晴彦、258~274(2007.11)、査読無

[学会発表] (計3件)

①大井田晴彦、「新古今和歌集と中世和歌の世界—名古屋大学附属図書館後藤文庫蔵本を中心に—」、人文学研究方法の現状と展望—現地調査(Field Work)を中心に—、2008年11月23日、名古屋大学

②大井田晴彦、「伊勢物語・惟喬親王章段の主題と方法」、名古屋平安文学研究会、2008年3月23日、中京大学

③大井田晴彦、「日本古典文学に見る国際交流—遣唐使をめぐる—」、名古屋大学・陝西師範大学国際学術討論会、2007年11月23~24日、中国・陝西師範大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大井田 晴彦 (OIDA HARUHIKO)

名古屋大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：70313179